

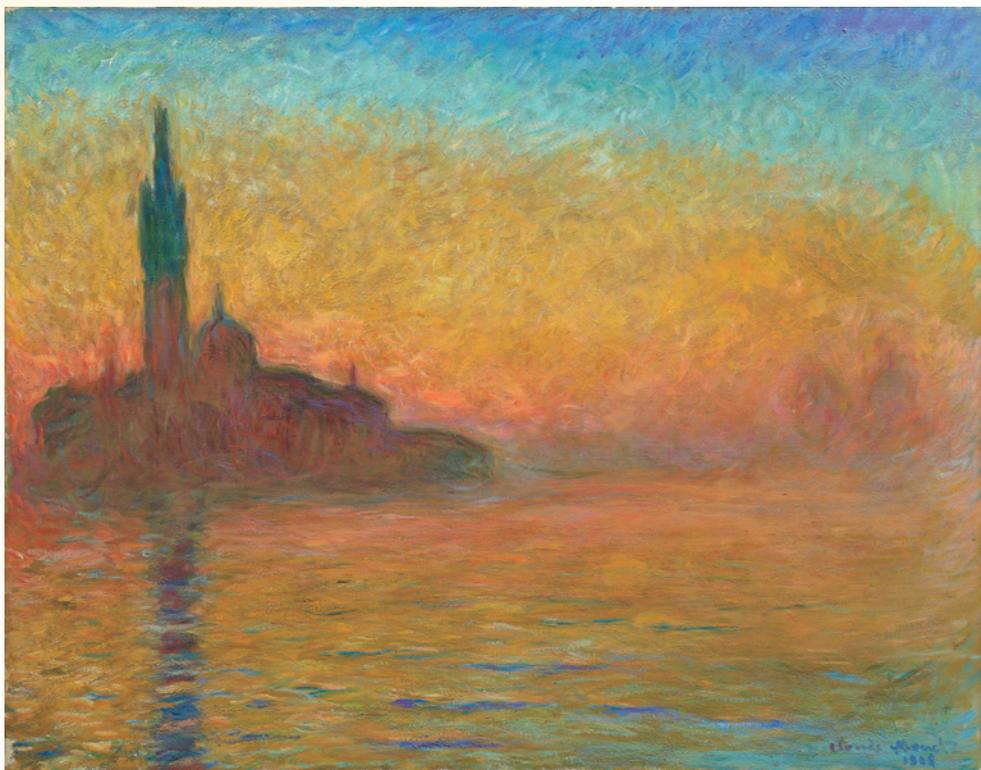
Section 2

風景画への旅

— 描かれた景色に浸ってみよう

風景画は、自然の風景や都市の景観を描いた絵画です。風景は、季節の移り変わりや天候、それに伴う自然、街、建物などの景観とも相まって、人々を魅了してきました。風景は常に私たちの身近にあり、風景を眺めて、癒されたり、何かを感じたり、思想を深めたり、時には人間の力の及ばない光景を崇めることも、普遍的に行われてきました。

風景は絵画表現のなかで主要な主題のひとつで、風景画は、画家それぞれの表現を通して、描かれた時代や社会の自然観、空間の意識などを伝えてくれるものでもあります。



クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》1908年頃 アーティゾン美術館

西洋絵画において、風景画が花開いた時期の一つに、19世紀のフランスが挙げられます。鉄道網の発達やチューブ式絵具の発明も後押しし、画家たちは積極的に戸外制作を行い、身近な景色を多く描くようになりました。

このセクションでは風景画を、描かれた「街」と「自然」とに分けて展覧します。風景画の魅力は、絵の中に広がる景色へと見る者を誘い、惹きつけるところにあります。描かれた風景の中を旅している気持ちで、実際にその場所で景色を眺めているかのように想像して鑑賞することで、風景画の楽しみは広がります。

ここ数年、移動の制限等が、安心して自由な旅を少しだけ遠いものにしました。風景画への旅は無限大で、国境はなく、心を解きほぐしてくれます。選りすぐりの風景を体感する旅へ、Bon Voyage!

Traveling into Landscapes - Experiencing Scenery

Landscape paintings depict natural scenery and cityscapes. Capturing the changing seasons and the weather combined with scenes of natural settings or the built environments of the city and its structures, fascinate viewers. Landscapes are always a familiar part of our lives. By looking at the landscape, experiencing healing, sensing something, deepening our thinking, revering scenes beyond human powers—those are actions and reactions experienced eternally.

The landscape is one of the important subjects in painting. Through landscape paintings, artists, each in his or her individual style, communicate the period they are depicting, natural views of society, and their recognition of space. In the history of painting in the West, the landscape reached one of its peaks in nineteenth-century France. Spurred by the development of the railways and the invention of the paint tube, painters actively sought to work out of doors and depicted many scenes that were familiar parts of their lives.

In this section, landscape paintings are displayed in two groups: paintings of urban areas and nature. The delight of the landscape painting is its power to draw the viewer into the scene unfolding in the painting. Let our imaginations go work as we view them, as if we are actually traveling there and strolling in those landscapes. The world within the picture plane expands further.

Safe and free travels have been a bit far from us due to the restrictions in the past few years. Traveling into landscapes however, is infinite, borderless, and utterly relaxing. To the journey to experience the fine selection of landscapes, Bon Voyage!

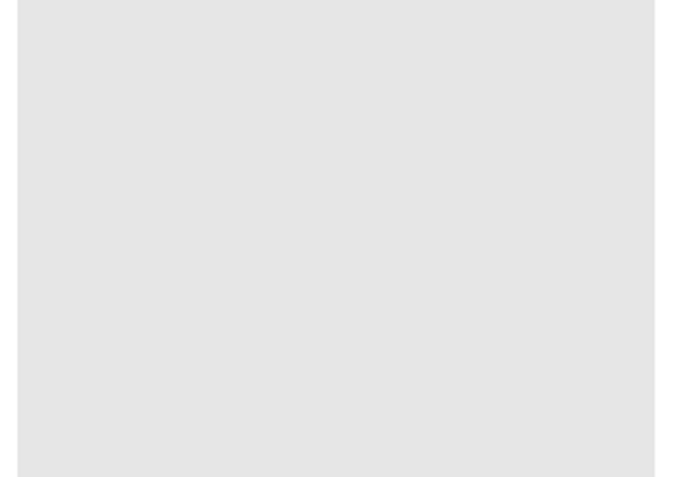
ARTIZON MUSEUM



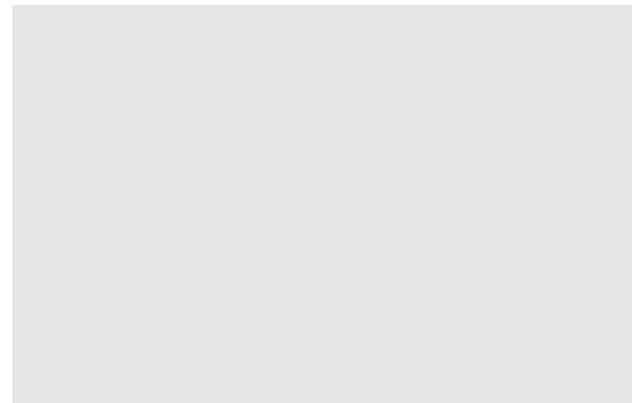
岸田劉生《街道(銀座風景)》1911年頃 アーティゾン美術館



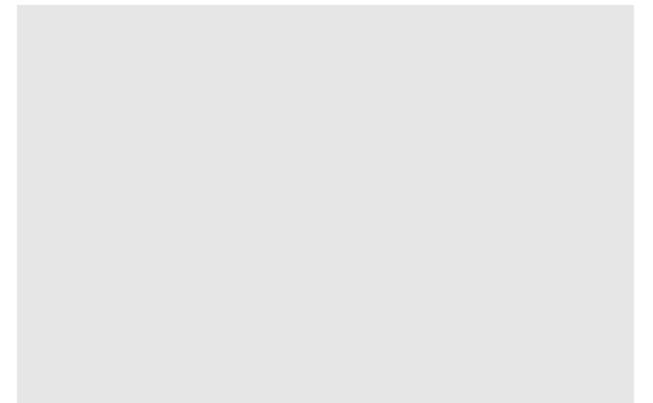
2023年1月の岸田劉生実家付近(撮影:江藤祐子)



岸田劉生《生家の図(楽善堂)》1928年頃 茨城県近代美術館



(帝都名所)京橋銀座通り 中央区郷土資料館
大正中期の銀座中央通りを写した絵葉書。



銀座煉瓦街の煉瓦 明治中期 江戸東京博物館

岸田劉生《街道(銀座風景)》

1. 風景画への旅 行き先:銀座

大正から昭和初期にかけて活躍した画家、岸田劉生(1891-1929)が、20歳のときに、実家近くの銀座通りを描いたものと考えられています。往来する人物の詳細や、実際にはあった路面電車の線路や電線などは省略されていますが、日差しに照らされた街並と道路が、明るい雰囲気を与えています。画面中央の街角に建つ赤煉瓦の建物や、右端の路面電車は、当時の銀座通りを象徴するようなモチーフです。この頃劉生は、雑誌『白樺』を通して知ったポスト印象派に関心を寄せ、特にフィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)を感じさせる強烈な色彩と光の輝きに惹かれていました。明るい色彩で表現されたひなたの道路が、画面の半分以上を占め、建物との印象的なコントラストを生んでいます。



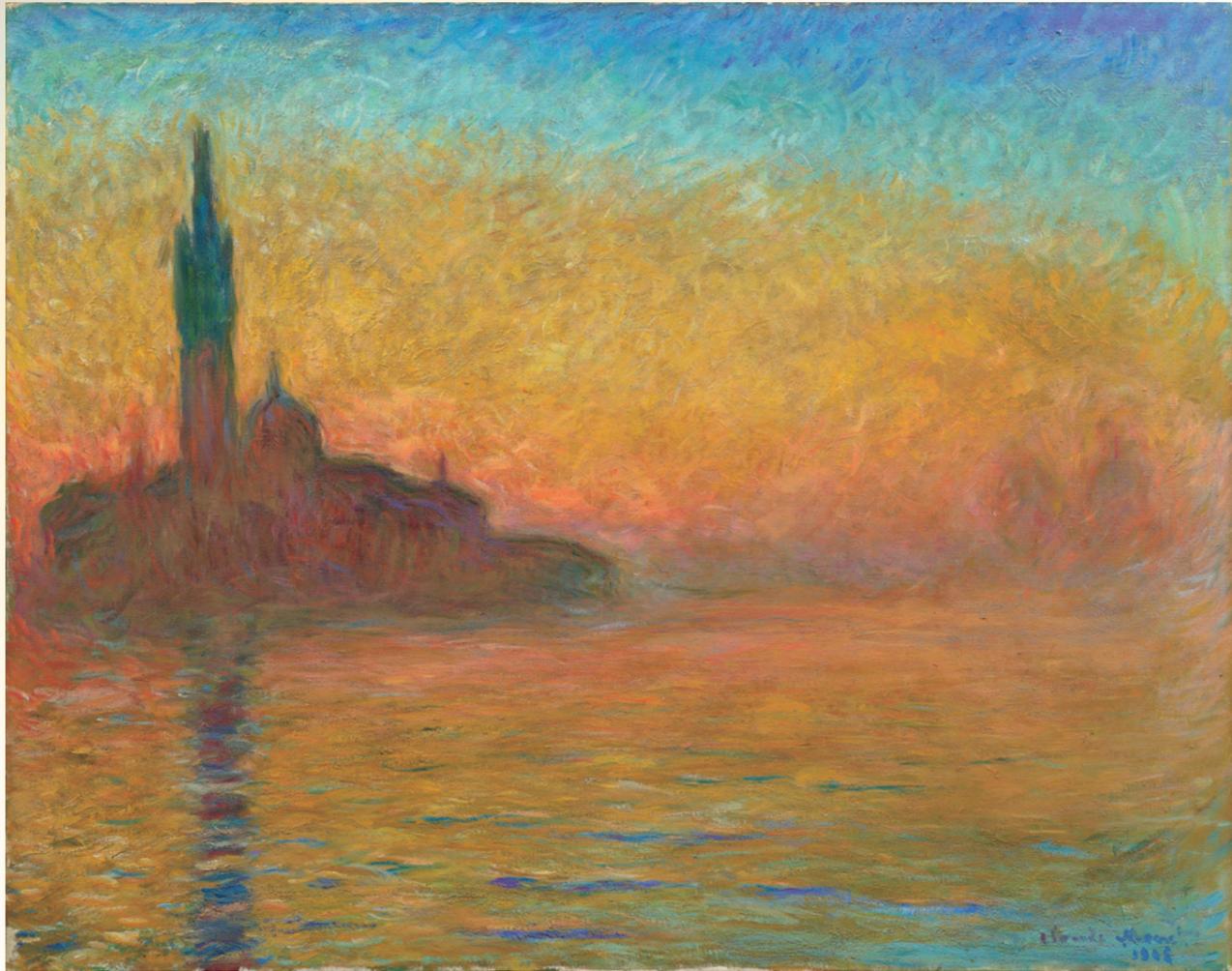
岸田劉生《麗子像》1922年 アーティゾン美術館
4Fの石橋財団コレクション選に出品中

2. 岸田劉生

岸田劉生は、日本の近代美術の歴史において独創的な絵画の道歩んだ画家です。劉生は、新聞記者であり菜屋「楽善堂精錡水本舗」を経営する実業家、岸田吟香(1833-1905)の四男として、銀座で誕生しました。黒田清輝(1866-1924)に師事して本格的に油彩画を学びます。そして、雑誌『白樺』が紹介するポスト印象派の画家たち(ポール・セザンヌ、ポール・ゴーガン、フィンセント・ファン・ゴッホ、アンリ・マティスら)を知り、影響を受けます。1912(大正元)年10月には、高村光太郎(1883-1956)、萬鉄五郎(1885-1927)ら仲間たちとともにヒュウザン会を結成し、画壇にデビューします。その後、細密描写による写実表現を突きつめ、娘麗子(1914-1962)が誕生すると、彼女をモデルとした多くの「麗子像」を残しました。

3. 描かれた場所

この作品の場所にほど近い劉生の実家は、現在の銀座中央通り沿い、アーティゾン美術館から徒歩約10分のところ(東京都中央区銀座2丁目)にありました。画面中央に赤煉瓦の建物が見られるように、描かれた当時の銀座には、煉瓦でつくられた建物が多くありました。「銀座煉瓦街」と呼ばれ、1872(明治5)年2月に起きた、銀座、築地一体約95ヘクタールを焼いた銀座大火の後、明治政府が都市の不燃化を目指してつくった、耐火構造の煉瓦による西洋風の街並で、延べ約10kmに及びました。銀座で青年期までを過ごした劉生にとって、煉瓦の街並は、幼い頃から慣れ親しんだ風景でした。銀座煉瓦街は、1923(大正12)年の関東大震災で壊滅しますが、1988(昭和63)年に銀座8丁目の金春屋敷跡で煉瓦街遺構が発掘され、当時の煉瓦が江戸東京博物館に収蔵されています。



クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》1908年頃 アーティゾン美術館

クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》

1. 風景画への旅 行き先:イタリア、ヴェネツィア

フランスの画家クロード・モネ(1840-1926)が、67歳のときに、旅先のイタリアの都市、ヴェネツィアで見た風景を描いた作品です。夕日に染まる海に浮かぶのは、サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会。教会の向こう側に沈みゆく太陽の燃えるような光が、空、水面、教会を輝かせています。海の色は水平線に向かうほど赤みを増し、逆光の中の教会は、細部を省略したシルエットで表されています。揺らめく水面は横向きの筆致であらわされ、海からの湿気を帯びた大気はうねるような筆致で描き分けられています。画面の上か

ら下へ、オレンジ色を中心に青や緑で描かれた、空と海の鮮やかな色彩は、この景色に魅了された画家の想いを反映しているかのようです。モネは大胆な筆致と色彩で、黄昏の水辺の色調の変化を捉え、その瞬間の光の様相、自然の表情をあらわそうとしました。

2. クロード・モネ

モネは印象派を代表する画家です。少年期を北フランスのル・アブルで過ごし、そこで16歳年上の風景画家ウジェーヌ・ブーダン(1824-1898)に出会い、戸外で描くことの大切さを教わりました。その後パリに出て、シャルル・グレル(1806-1874)の画塾でピエール=オーギュスト・ルノワ

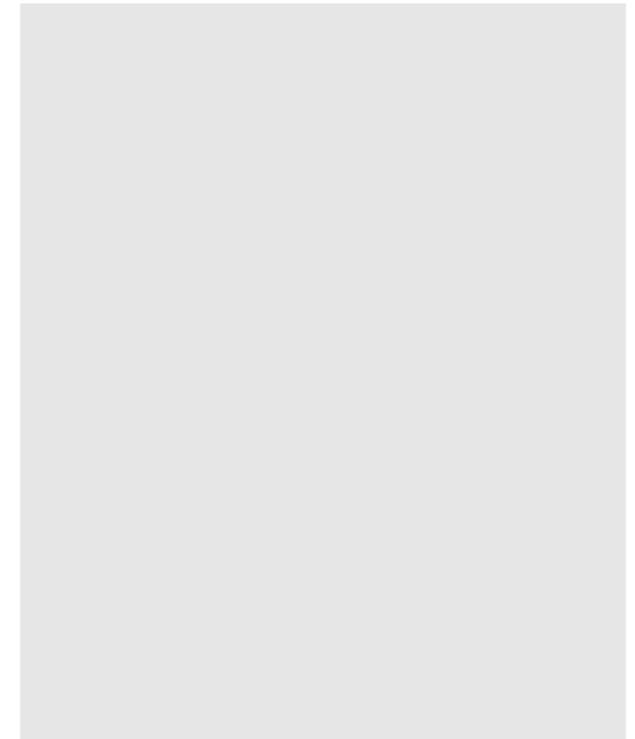


サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会 (撮影:江藤祐子)

ル(1841-1919)やアルフレッド・シスレー(1839-1899)らと知り合い、1860年代末には、鮮やかな色を小さなタッチで画面に置く手法を用いて、光に満ちた明るい作品を描くようになります。1874年の第1回印象派展に《印象・日の出》(1872年、マルモッタン美術館)を出品、その作品への批評が「印象派」という言葉が生まれるきっかけとなりました。1883年、セーヌ川沿いのジヴェルニーに転居、自宅の庭に睡蓮の池をつくり、その後晩年まで、たくさんの睡蓮の作品を制作します。1880年代末からは、刻々と移り変わる光を画面に捉えるための試みとして、同一のモチーフを、異なる時刻・天候の下で描いた連作を数多く残しました。

3. モネのヴェネツィア旅行

1908年9月末、67歳のモネは、静養する目的で、妻アリスとともにイタリアの都市ヴェネツィアを初めて訪れます。画家ジョン・シンガー・サージेंट(1856-1925)を通じて、ロンドン滞在中に知り合ったメアリー・ハンター(1857-



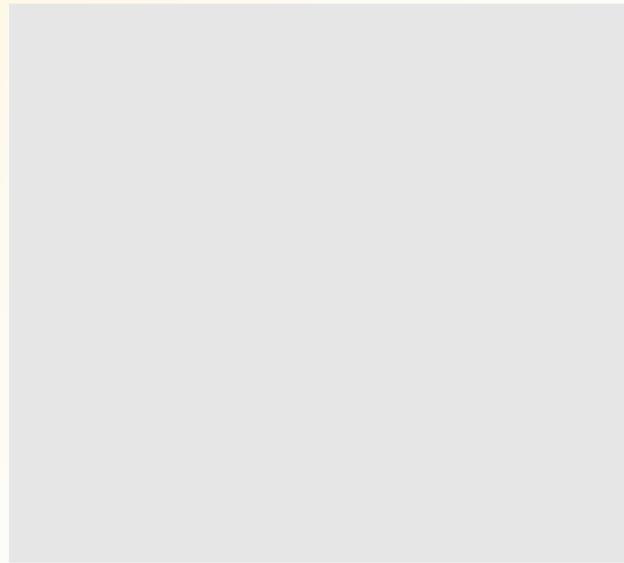
サン・マルコ広場にて、ヴェネツィア滞在時のモネ夫妻 1908年10月
Musée Marmottan Monet, Paris, France/Bridgeman Images

1933)の誘いがあったからでした。ハンターは、サロンの主催者で、芸術家たちのパトロンでした。

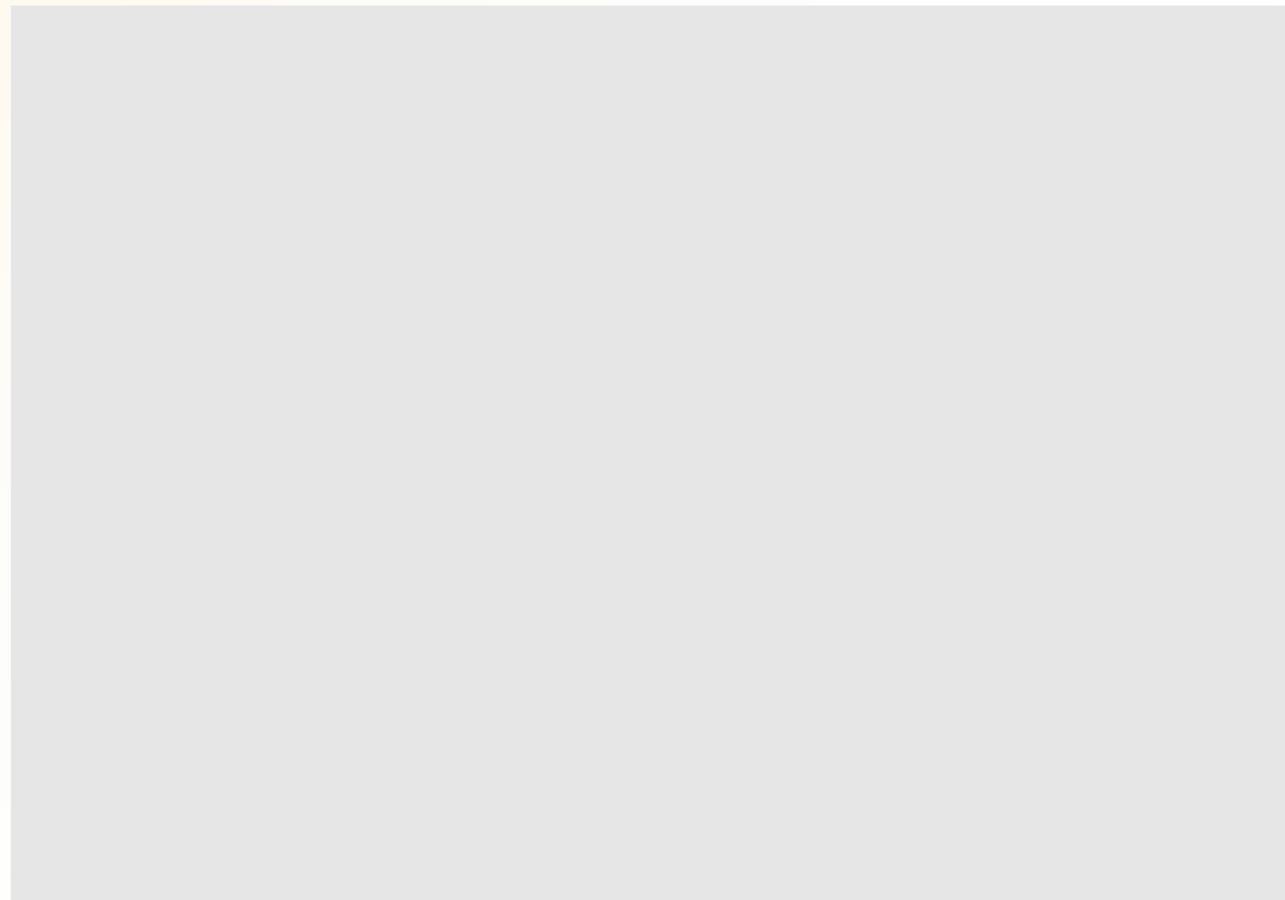
健康と視力の衰えに悩まされていた当時のモネにとって、この旅は良い気分転換となり、この都市に魅了されたモネは、しばらく滞在することを決めました。そして約2カ月の滞在中に約30点の作品に着手しました。

モネ夫妻が滞在した大運河沿いのグランドホテルブリタニアからは、サン・ジョルジョ・マッジョーレ島にそびえるサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会を目にすることができました。モネ夫妻が滞在中のヴェネツィアの日入り時間は、秋の深まりに従って、19時頃から17時頃に推移します。《黄昏、ヴェネツィア》はその時間帯の光景を描いたものです。

グランドホテルブリタニアは、建物に当時の面影を残しつつ改装され、現在はセントレジス・ヴェニスというホテルになっています。



セントレジス・ヴェニス
©Donyanedomam



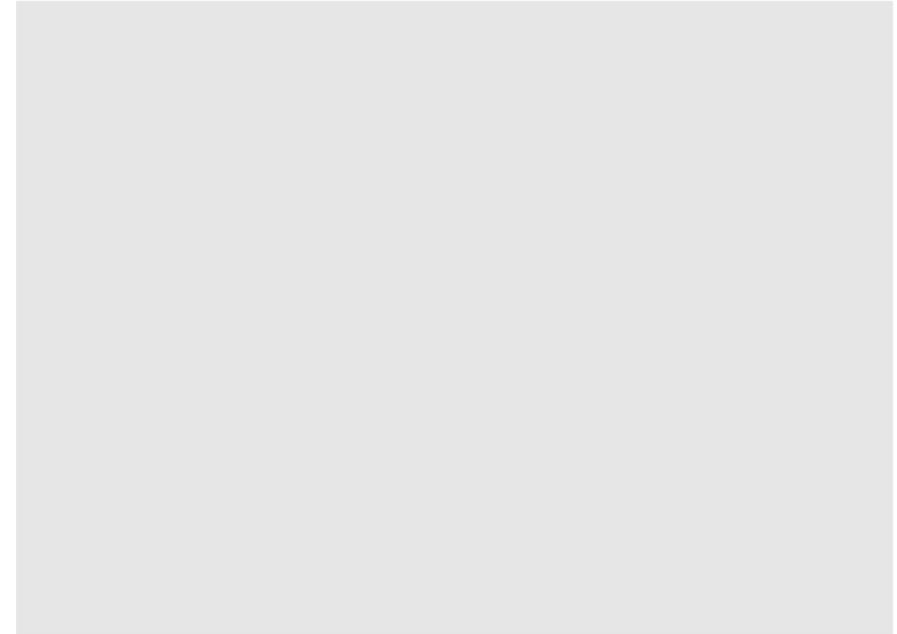
クロード・モネ《サン・ジョルジョ・マッジョーレ、黄昏》1908年 カーディフ国立博物館
Claude Monet, *San Giorgio Maggiore by Twilight*, 1908 © Amgueddfa Cymru—Museum Wales

4. ヴェネツィア滞在後

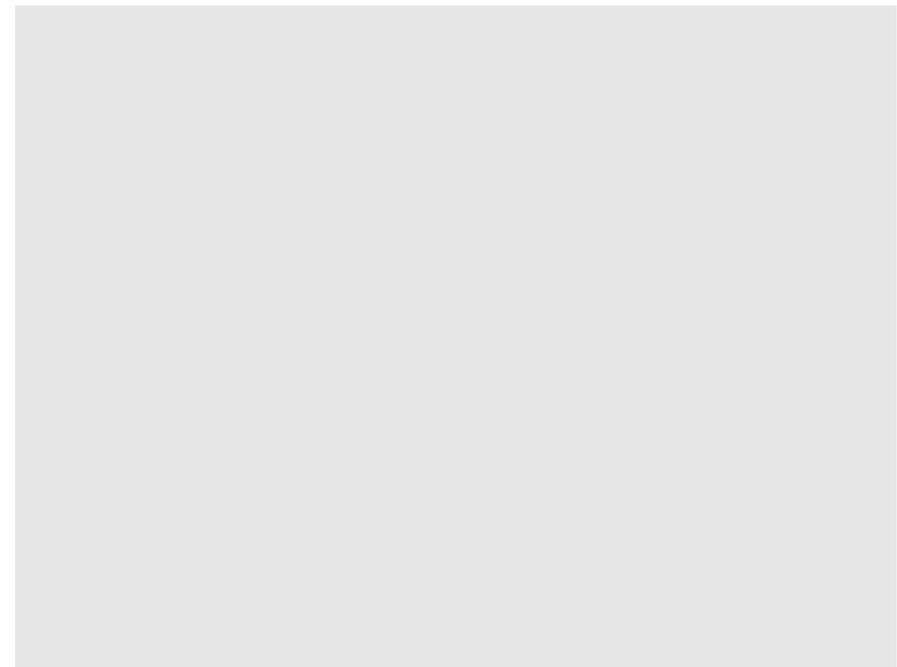
モネはヴェネツィアで着手した約30点の作品を、フランス、ジヴェルニーのアトリエに持ち帰りました。大半の作品は画商ガストン・ベルネーム＝ジュール(1870-1953)が買い取ることになりましたが、モネは作品の仕上げをヴェネツィアの地で行おうと、それらをすぐには手離しませんでした。しかし、モネのヴェネツィア再訪はついに実現せず、作品の仕

上げはジヴェルニーのアトリエで行われました。

モネはヴェネツィアの黄昏を描いた作品を、ほぼ同じ構図でもう1点制作しており、その《サン・ジョルジョ・マッジョーレ、黄昏》は、イギリスのカーディフ国立博物館に所蔵されています。1912年5月、モネがヴェネツィアで着手した作品29点の展覧会が、パリのベルネーム＝ジュール画廊で開かれ、《サン・ジョルジョ・マッジョーレ、黄昏》は、同展に出品されました。



クロード・モネ《サン・ジョルジョ・マッジョーレ》1908年 カーディフ国立博物館
Claude Monet, *San Giorgio Maggiore*, 1908 © Amgueddfa Cymru—Museum Wales



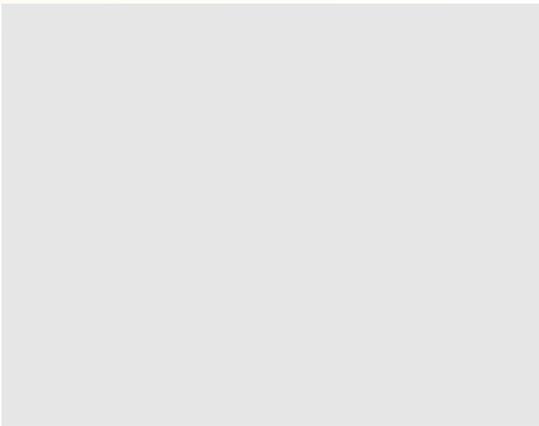
クロード・モネ《パラッツォ・ダ・ムーラ、ヴェネツィア》1908年 ワシントン・ナショナル・ギャラリー
Claude Monet, *Palazzo da Mula, Venice*, 1908, Chester Dale Collection, National Gallery of Art, Washington 1963.10.182

5. 《黄昏、ヴェネツィア》日本へ

《黄昏、ヴェネツィア》は、横浜正金銀行に勤め、華族の家柄でもあった黒木三次(1884-1944)の旧蔵品で、黒木はこの作品をモネから直接購入しました。黒木の夫人の竹子(1895-1979)は、小説家^{なが よしろう}長與善郎(1888-1961)の親戚筋にあたり、実業家で、国立西洋美術館のコレクションの礎を築いた松方幸次郎(1866-1950)の姪です。黒木は、国際金融事情の調査のために、1918年にパリに留学、モネのジヴェルニーの家に自由に入出入りできる関係を築いていました。黒木がモネから《黄昏、ヴェネツィア》を入手したのは、1919～1922年頃のことです。竹子は日本好きのモネのために、いつも着物でジヴェルニーのモネ邸を訪れていました。この作品を黒木がモネに所望したとき、モネは「亡き妻と一緒に旅行したヴェネツィアでの記念の作品なので、これだけは譲れない」と断りますが、黒木が竹子に「私がほしいので

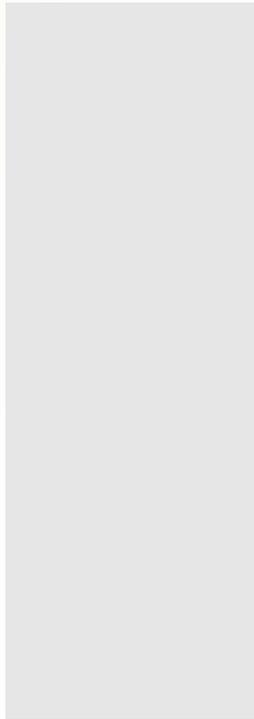
すと言え」とつぶやき、仕方なく竹子がその通りに希望を述べると、モネは両手を広げ、肩をすぼめて「あなたからそう言われたのでは、どうしてもお譲りしないわけにはいかないですね」と笑って譲ったというエピソードが残っています。(田中記者「モネと私 松方竹子さんの思い出」『読売新聞』夕刊、1973年4月19日より)

モネの《睡蓮の池》も黒木三次旧蔵品です。黒木がフランスで収集したコレクションを携えて日本に帰国したのは1922年。《黄昏、ヴェネツィア》を含め、黒木がフランスで収集したコレクション32点は、光風会第12回展(1925年2月1日～27日)に特別陳列されました。《黄昏、ヴェネツィア》は、黒木ののち、大阪の実業家和田久左衛門(1890-1968)が所有し、その後、アーティゾン美術館(旧プリチストン美術館)の創設者である石橋正二郎(1889-1976)が入手することになりました。



左から黒木竹子、モネ、モネの孫リリー・パトラー、ブランシュ・オシュデ、ジョルジュ・クレマンソー。ジヴェルニーのモネの庭にて、黒木三次撮影。1921年

Photo 12 / Alamy Stock Photo



エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャン《日本婦人の肖像(黒木夫人)》

1922年 国立西洋美術館
松方コレクション

Photo: NMWA/DNPartcom



クロード・モネ《睡蓮の池》1907年 アーティゾン美術館

※アーティゾン美術館所蔵作品以外は、すべて複製図版による資料展示です。

*Except for the collection of the Artizon museum, all exhibits are reproductions.